オブジェクション１５９

幻滅編

岡森　利幸

この四半期には、セクハラ（性的嫌がらせ）やパワハラ（権力による嫌がらせ）、銃刀による暴力事件など、興味深いことが多く発生したが、全部を書くわけにもいかないので、その一部について取り上げる。その選択の基準は私の気まぐれによる。

本編は、次の１２項目からなる。

①失墜した山口達也メンバー
②アイスホッケー女子クラブのパワハラ騒動
③試合に出してやるから、関西ＱＢを壊してこい！
④塀のない刑務所から逃亡した男
⑤狛江市長のセクハラ認識
⑥自転車と歩行者の殺傷事件
⑦茅ヶ崎駅前の国道で信号無視した赤い車
⑧塩を多量に口に入れられた女児
⑨目黒・女児が残した悲痛な詫び状
⑩麻生太郎氏・近ごろの妄言録
⑪若い巡査が発砲したわけ
⑫審判を殴り倒したバスケット留学生

①失墜した山口達也メンバー

以下は、新聞記事の引用・要約。

【毎日新聞朝刊 2018/4/26 社会
ＴＯＫＩＯ山口メンバー（46）書類送検、強制わいせつ容疑。
今年2月女子高生を自宅マンションに呼び、無理やりキスをするなどしたとしている。自宅では酒を勧めていたという。山口メンバーが司会を務めるＮＨＫの番組を通して知り合った。】

【毎日新聞朝刊 2018/4/27 社会
山口メンバーが無期謹慎となった。会見で涙浮かべ謝罪した。】

【毎日新聞朝刊 2018/4/29 社会
ＴＯＫＩＯ山口メンバー書類送検を巡って、執拗な

被害者たたきがあった。有名タレントたちは被害者が悪いという。】

【毎日新聞朝刊 2018/5/2 社会

山口メンバーが5月1日、起訴猶予になった。被害者側との示談が成立したためか、4月24日に被害届を取り下げていた。NHKは本人が司会の教育番組「Rの法則」の放送を当面中止すると発表した。】

【毎日新聞朝刊 2018/5/8 社会

ジャニーズ事務所は6日、山口さんとの契約を解除したと発表。5月6日にメンバーの総意として退職願が提出され、山口さんも改めて辞意を示したため、受理を決めたという。】

日曜日の午後7時からのテレビ番組「ザ鉄腕ダッシュ」は、私の好みの番組の一つだった。彼らが若いころから続けている番組であり、山村や孤島での生活の体験的な知恵などが紹介されていた。TOKIO（トキオ）は男5人で構成された音楽グループであり、なかなか好青年ぞろいだった。人気を保ち続け、ずいぶん長く活躍している。今では青年とはいえない年代になっているけれど、それぞれ個性と才能を持ち、その他のテレビ番組の司会を務めたり、俳優として映画にも出演したりして活動の幅を広げていた。なかでも山口達也は温厚でまじめな態度を示していたから、私としては一番好印象を持っていた。その山口達也が女子高生にわいせつ行為をして書類送検されたニュースは、驚きだった。

今回の舞台裏になったNHKテレビ番組「Rの法則」にしても、彼は若い人たちに混じって、若い人たちに共通的な話題を取り上げ、そつなく司会進行をしていたという印象を私は持っていた。

警察が強制わいせつ容疑で書類送検したのは、2人の証言や物証があるから、確信を持ってのことだろう。それに「厳重処分」という意見書がつけられていたというから、警察は、悪質度が高い事件とみていたことになる。だいたい、証拠が挙がっているのに素直に犯行を認めなかったり、反省の色がなかったりすると、そうなる。それに相手が若すぎた（16～17歳とされている）。

その数カ月まえに新聞で、山口達也が2016年8月に離婚していたという小さなニュースにふれたとき、私は彼を好青年と思っていたから、意外に思った。なぜだろうという疑問がわいた。元妻が娘二人を連れて出て行った事情は、よくわからないが、よほどのこと

であろうし、山口達也に何かしらのよからぬ言動があったから、愛想をつかされたとみるべきだろう。それは今回の事件の前兆だったことになる。

事件の一連の状況を想像してみよう――

1 マンションの一室で

山口達也はマンションの一室で、ソファーにくつろぎながら、久しぶりの焼酎を飲んでいた。それまで悪化した肝臓（アルコール依存症の可能性がある）の治療で入院していたというから、とうぜん禁酒をしていた。そしてよからぬことを想像しはじめた。〈一発やりたいなぁ。でも、相手は誰でもいいってわけじゃないんだ。誰にしようかな。やはり若い子がいいよね。そうだ、「Rの法則」のあの子がいいかな。初々しい肉体を想像すると、もうたまらんね、下の方がうずいてしまうよ。電話して呼び出そう。こういうときのために、番組のスタッフから番号を教えてもらっているもんね〉

「もしもし、Aさんね？　急にごめんね。いまからこちらに来れない？　そう、ボクのマンション。若い人の話を聞きたいし、したいこともあるし、ああ、話をしたいということ。手ぶらでいいんだよ。ね、ボク一人で待っているよ、いいね？」

少女Aはしぶしぶ行くことを承諾したが、悩ましいことだった。少女Aにとって山口達也はお兄さん的存在であり、芸能界では大先輩だった。「Rの法則」では、番組に出演する若い子たちを誰にするか、司会者として意見が言える立場にある。へたに断ったりすると、心証を悪くしてしまい、いい顔されなかったり不遇になったりすることだろう。今後の自分の活動に支障が出るかもしれないと思うと、やむをえなかった。

ひとつ気がかりなのは、山口達也とは年代が大きく違うから、話が合う自信がない。お父さんの年代の人になる。お父さんはお説教的なことを言うことが多いから、興味がないし、うっとうしい。煙たいことを言われるかもしれない。もう一つ、一対一で一つの部屋にいると、男女関係に発展するおそれがあることだ。少女Aにとっては、山口達也は恋愛の対象外であり、そんな付き合いは避けたい。心を寄せる男の存在があるし……。彼女は考えているうちに、一つの案を思いついた。友人を誘っていくことだった。

2 マンションの一室、第二場

「おや、二人で来たの？　まあいいや、そのほうが楽しいよね」

山口達也は二人を招き入れ、ソファーに座らせると、しばらくたわいのない話で場をとりつくろった。
「何か飲みなよ、ん？　アルコールは飲めない？　学校が禁止している？　ここでは、この山口マスターが許す」
山口達也がしつこく勧めるものだから、二人は口をつける程度に飲んだ。
そして、まもなく山口達也が本性を現す。「さぁて」と言いながら、少女の横のソファーに割り込むように座ると、手を回して体を抱きこんだ。山口達也は気づいたように少女Ｂに振り向くと、「Ｂさんはその辺で見ていなよ。順番にしてあげるから……」
山口達也は少女Ａに抱きついた。「いいね、ギターのような体型が一番いいんだ。おしりの丸みがたまらんね」と言いながら、キスをしようとした。唇が触れる直前、少女Ａはその酒臭い息を嗅いで顔をそむけた。直接のキスを避けたが、山口達也は頬に唇を押し当てた。顔の辺りをなめまわしてから、右手で胸を触った。もみもみすると、乳房のふくらみを確認できた。そして、スカートの中に手を入れてきた。パンティーに手をかければ、それはするりと剥ぎ取れるはずだった。しかし、少女は体を硬くし、脱がされまいと必死になって両手でパンティーを押えた。
山口達也が力をいれて剥がそうとするが、引っかかったように、薄い布が伸びるだけだった。意外な行動に、山口は二、三度試みたが、行為を中断した。ソファーから立ち上がると、目を吊り上げて「**なんだよ、やらせないんなら、帰れよ！**」と怒鳴った。不満をあらわにして怒った。
その豹変した態度と、恫喝するような言い方に、少女たちは震え上がった。山口の気分を損ねたことに恐縮しながら、身支度を終えると、逃げるように部屋のドアを出ると、少女Ａは携帯電話を取り出し、すぐに母親に電話した。
「助けて、ママ。山口達也さんに襲われた！　すごい怒っているの」
「ええ？　暴行されたの？　パンティーを脱がされそうになったのね。まあ、何てこと……。警察を呼んで助けてもらうわね、どこ、今どこにいるの？」
「山口達也さんのマンションの中」
「その住所を教えなさい！」
数分で警察官たちが駆けつけた。
山口は、そのノックの音を聞いて、少女たちが戻って来てくれたと思ったが、男の声がした。「警察です」

3 警察・鑑識課で

病院の診察室のような部屋だった。手術台のようなテーブルもある。この部屋に通された少女Aを前にして鑑識官が諭すように告げる。「キスされそうになって、顔を背けたら、顔中をなめ回された？　まだ唾液がついているだろうから、採取させてくれたまえ」

結果的に、少量の唾液が採取され、DNA鑑定で山口達也のものとわかった。

「なめられたのは、顔だけ？　服の上から、乳房やしりを触られた？　脱がされたわけではないのね？　パンティーを脱がされそうになったけれど、必死に押えた？　ふ～ん、山口達也容疑者の手アカのようなものがついているかもしれないね」

そして鑑識官は少女の正面を見据えながら、固い顔で言った。「こういう案件では、膣にインサートされたか、そこに体液が残っているかどうかが、一番重要なことなんだ。無理やりインサートされたら、それに傷が残るものだ。調べさせてくれたまえ。ん？　いやですって？　これを調べることが、あなたの証言を裏付けることになるし、確実な証拠ともなる。被害者の中には、気を失ったりして、よく覚えていない方もおられる。警察の鑑識に協力してください。いいですね！」

それは厳命だった。少女はしかたなく、上下の服を脱ぎ、足を広げて手術台のようなベッドに横たわった。山口達也が臨んだ体勢で……。診るだけでなく、写真にもきっちり記録されるのだろう。

4 芸能プロダクションの事務所で

ジャニーズ事務所の幹部「このたびは、うちの山口達也がとんでもない行為に及び、申し訳ありませんでした」と頭を深く下げた。

某プロダクションの幹部「配下のタレントどもを、どういう育成方法や管理をしているのだね。達也くんは酒を飲みすぎて肝臓を悪くしたそうだが、事務所がタレントの健康管理もろくにしてなかったことにならないか。達也くんは甘っちょろいと仲間のメンバーに言われていたが、甘っちょろいのはどちらなんだね。……うちの子らは、マンションに呼び出され、仕方なく行ってみたら、こんなことになった。のこのこマンションに行くほうが悪いなどと、世間では、えらくバッシングされてしまったけれど、番組の司会者としての地位を利用して呼び出したのだろ。本人の二次的ショックも大きい。もうタレント活動に支障が出ているのだよ」

「たいへん、すみませんでした」

「すまないんだよ、謝ってすむことなら、警察はいらんのだよ。こんなことをただですまそうとは思っていないだろうね。落とし前をつけてもらわにゃいけん」
「もちろん、このとおりです。できれば穏便に……」
カバンから厚めの封筒を差し出す。
それを一目見て、「これですまそうというのか？……ぜんぜん誠意が示されていない。示談にもならんだろ。**出直してこい！**」
「ははー」と深々と頭を下げた。
「バサッ」　その頭を封筒でたたきつけたから、封筒の中身が散らばった――

つまり、山口達也メンバーの場合、強姦未遂というべき状況だったわけだ。時代劇なら、悪徳代官が若い町娘二人を順番に手篭めにするという場面だった。
山口達也の酒癖の悪さ、酒を飲むと女に手を出したがる性癖は、友人・知人たちの間では知られていることだったという。酒を飲まないときは「まじめな青年」だが、アルコールが入ると自制が効かないタイプなのだろう。彼が酒乱になったのは、かなり前からのことらしい。
酒で肝臓を悪くし、一カ月間ほど2度目の入院をしていたのに、退院してすぐに酒を飲んだというから、どうしょうもない人だ。本人の自覚や自制心うんぬんよりも、根本的な治療が必要だと思われる。酒のせいでないとするならば、何が原因だったのだろう。
離婚の一因にも酒がなっていたのだろう。それが原因だとすれば、アルコール依存症を完治させればいいから、そのときは復活の線もありそうだ。しかしながら、記者会見で、無期限謹慎を告げられていた本人が涙ながらに「将来席がまだあるとすれば、トキオに戻りたい」と訴えたけれど、現状、復帰の道は閉ざされた。日本ではタレントのような人気商売は、うわべだけでも品行方正でなければならないし、一度ついた汚点はなかなかぬぐえるものではないから。
そしてメンバーひとりの愚行は、グループ全体が責任を問われる。グループの出演がキャンセルされたりして、山口は他のメンバーからもそうとうに恨まれたわけだ。山口を除く4人のメンバーの謝罪会見では、仲間をかばうようなそぶりがなかった。山口のいつか戻りたいという切なる願いも、「甘っちょろい！」などと言ってはねつけた。彼らにとって苦渋の会見だったけれど、長年、山口は彼らの仲間（メンバー）だったんだから、少しはかばうような思いやりを見せてほ

しかったと、ふと私は思った。
若い女性に手を出そうとしたが、未遂に終わっている。それだけのことなのに、その後の世間の冷酷さに私は少々やり切れなさを感じる。起訴猶予になったから刑事罰は課されなかったけれど、社会的制裁は大きかった。当初、芸能活動を「謹慎する」形だったのに、へたな謝罪会見したためか、結局、契約解除の厳罰処置をくらってしまい、山口達也はタレント生命を絶たれた。芸能界に復帰することなど、もう考えられない。人気商売は厳しい。

---

②アイスホッケー女子クラブのパワハラ騒動

【毎日新聞朝刊 2018/5/20 社会
北海道清水町のアイスホッケー女子クラブ「フルタイムシステム御影グレッズ」で、男性コーチによるパワーハラスメントがあったとして、このコーチと監督ら5人の指導者全員が解任された。その後、選手22人のうち10人が退部した。3月に帯広であった女子日本リーグの試合中、男性コーチが指示通りに動けなかった高校生選手3人に「ユニホームを脱いで出て行け」などと激しく叱責したという。怒声を浴びせられ、苦痛を受けたとする保護者の指摘があり、チーム統括の西山輝和部長らが「言葉による暴力があった」と認定し、保護者と選手に謝罪した。西山部長は「指導陣の連帯責任として全員を解雇した」と話した。退部した選手の中には、解任に納得できなかった者もいたという。】

コーチが激しく叱責したことがパワハラとみなされたわけで、そのコーチを含め、連帯責任だといって指導者全員が解任された。これで問題が解決されたかというと、そうではなかった。選手22人のうち10人が退部した。これではチーム崩壊同然だろう。平昌五輪の代表選手を含む名門チームでの出来事だから、おおごとだ。選手たちの退部は、その処分に抗議してのことだろう。
先ず「どうして連帯責任なんだ？」という疑問が生じたことだろう。それよりも、一人の総括者が専横的に全員解雇をしたことに選手たちが反発したことが大きいと私はみる。「どうしてコーチ全員解雇なんだ？」という強い疑問が生じた。「処罰として重過ぎないか」という疑問が出されたことだろう。
「ユニホームを脱いで出て行け」などというのは、選

手を叱咤激励するための監督やコーチが使う常套句でもある。選手たちが指示した通りにやらなかった、あるいはできなかった場合、いらついて感情的になり、つい、怒声で言ってしまう「決まり文句」なのだ。つまり、暴言というよりも、よく言えば、熱血指導の表出だ。それに、アイスホッケーのユニフォームは重装備であり、簡単に脱げるものではないから、それを見越して言ったのかもしれない。

言われる側にとって、それは究極的にきつい言葉だ。試合中だったから、多くの観客の前で怒鳴られたことになるから、より強いインパクトになる。暴言に近いものになったのは確かだろう。へたすると、選手のなかにはコーチの言に従ってそのまま出て行ってしまう。それを真に受けて、むくれて出て行ってしまい、二度と戻ってこないのであれば、試合放棄にもなってしまいそうだ。本気で「出て行け」と命じたわけではないから、怒鳴る側にしてもそれは望まない。

この場合、プレーにゆるみがあった選手が「すみませんでした」と、一言、詫びを入れればいいことだろう。それにしても、未熟な選手を指導するなら、なにか別の言い方があるものだろう。これは未熟な選手と未熟なコーチの組み合わせといったところかもしれない。

それにしても、コーチが怒鳴りたいのなら、試合が終わってからにしてほしい。コーチが怒鳴るのは観客の目にも、見苦しい光景に映る。「選手を指導したいなら、競技会場でなく、ほかの練習場でやってくれよ」と私は言いたい。

その高校生選手たちが家に帰ってから、泣きべそをかきながら、試合中の出来事として「コーチにユニフォームを脱いで出て行けと言われた」と親たちに話すことがあるだろう。すると、親としては、そのきつすぎる言い方に怒る。チームの責任者に文句を言いたくなる。怒鳴り込む勢いで統括者に電話する。

そんな苦情を受けて統括者が、結局そのコーチ一人だけでなくコーチ陣全員を解雇してしまったが、それこそパワハラというべきものだろう。退部した選手たちの声を私が代弁すれば、「監督・コーチを全員解雇するなんて、横暴すぎる。コーチと選手との間には、絆があるのに、それさえも断ち切られてしまった。コーチの暴言など聞き流せばいいが、こうなっては、試合中にユニフォームを脱いで出てしまったのと同じことだろう」

---

③試合に出してやるから、関西ＱＢを壊してこい！

【毎日新聞朝刊 2018/5/16 クローズアップ
日大アメフット悪質タックル。複数の関係者は、このプレーは日大の内田正人監督（62）による「指示だった」と証言する。日大の守備選手が背後から関学大のＱＢにタックルしたのは、ＱＢがボールを投げ終えた約２秒後だった。１年間出場機会のなかった守備選手に内田監督は試合前に「最初のプレーでＱＢを壊せ」と指示したという。】

【毎日新聞朝刊 2018/5/19 社会
関東アメフットオープン戦、今月２０日以降に組まれていた日大の６試合がすべて中止となる事態となった。】

【毎日新聞朝刊 2018/5/22 社会
５月６日の定期戦でタックルで負傷した関学選手が被害届を出したことを、２１日父親が明らかにした。意図的に人を傷つける行為が傷害罪にあたる可能性がある。】

【毎日新聞朝刊 2018/5/24 社会
日大アメフット部の監督を辞した内田氏が改めて悪質タックルの指示を否定した。井上コーチは辞意を表明。】

【毎日新聞夕刊 2018/5/29 あした天気になあれ
アメフットとＭｅＴｏｏ、大学世界選手権代表を辞退しろと命令される。】

【毎日新聞朝刊 2018/7/7 総合・社会
日大アメフット、５月６日の定期戦から８日後、日大関係者が選手らを呼び出して「タックルが故意に行われたものだと言えば、バッシングを受けるよ」と圧力をかけ、隠ぺいを図ったとされる理事が辞任した。】

スポーツで、選手たちは試合に出て活躍することを常に望んでいる。練習がいくらきつくても、試合のためなら耐えられるし、試合があることで励みになり、向上する。練習の成果を試合で見せるのだ。試合に出られないと、何のために練習しているのかわからなくなる。たとえば、陸上競技なら、スタートラインに立つことが一つの重要なステップであり、大きな意義がある。

試合に出場する選手リスト（ロスター）にも名前が載らず、同じ仲間たちが目の前で活躍しているのを見ているのはつまらない。試合に出られないことが長く

続くと、気分もめいる。補欠選手の悲哀なのだ。同様に、力の落ちたベテラン選手はそんな悲哀を味わうより、さっさと引退したほうが清々とした気分になるだろう。

府中での試合の一週間前、日本大学アメリカンフットボールチームのコーチは、一人の選手を練習からはずした。理由は「やる気がみえないから」という。この選手Aはここ1年ほど試合に出ていなかった。日本代表チームにも出るな、と命令された。彼は日本代表チームに選ばれる可能性のある選手だったわけで、そうとうな実力を持っていたことになる。

ここで練習にも参加させてもらえないことを告げられ、彼は動揺した。「オレはアメフトをやるために日大に入ったのに、もう止めろというのか、なぜ?……」

実力ある選手を試合にも練習にも出さないとは理解しがたいことだが、実は、選手を試合や練習から外すことを日大では「干す」といい、選手のやる気を引き出すためのいかさま的手段として、伝統的に用いていることが明らかにされている。その伝統の指導法は、つまり、上意下達のスパルタ式だ。上下関係を徹底させ、しごきまくるやり方だ。監督・コーチ・先輩たちは下位レベルの選手たちを極限まで追い立て、根性をたたき込む。途中で落伍するような、やわな者は、屈辱感・無力感・失望感にさいなまれてしまうことだろう。また、日大の不条理な指導方法として、「ハメる」があり、特定の選手を狙い撃ちにして、徹底的に痛めつけることをいう。たとえば、タックルの練習用には、クッション入りの人形の器具を使うのだが、人形の代わりに選手の一人にやらせる。何回か繰り返すと、その選手の体には大きなあざがつくことになる。これらは指導的立場の乱用と思えるものだ。

試合の数日前、内田正人(まさと)監督は、彼が一番信頼している井上奨(つとむ)(29)コーチを監督室に呼びつけた。関学(関西学院)チームとの対戦に臨んで、どうやれば日大チームが試合に勝てるか、いわば作戦会議をした。以下のように――。

「試合早々に相手のQBを壊せば、有利になるんだが、うちのメンバーでQBをつぶそうという元気のある者、おらんか?」

「いますよ、当って砕けるやつがいますよ」

「よし、確実に実行するように、言い含めろ! この作戦がうまくいけば、もうけものだ」――

翌日、井上奨(つとむ)コーチが選手Aに近寄り、耳元でささやいた。「相手のクォーターバック(QB)をつぶす

ために、ボクを次の試合に出してくださいと監督に言ってみろ」

Aはコーチの指示に従った。それを聞いた内田正人監督は、「ほんとにやるんだな？　よし、1プレー目で関西QBを壊してこい！」（正しくは関西というが、彼は関西と思い込んでいた。関西学院側が怒りまくる要因のひとつになったようだ。これは冗談）

試合直前にも念を押している。「おまえを試合に出すのは、QBを壊すためだぞ！　やらなきゃ、意味がないよ」

ひそかに耳元でささやいたのではなくて、他の複数のコーチたちの立会いのもと、周囲に聞こえるような声で言ったとされる。本人はそれをいくら否定しようと、日大の幹部が口止めしようと、複数の者が証言している。監督の意向は絶対だから、その場で、そんな卑怯な指示でも、反対できなかったようだ。誰もが、それでうちのチームが勝てればいい、ぐらいに思っていたことになる。しかし今では彼らの中に、〈その場で異議を唱えればよかった〉と悔やんでいる人がいるだろう。伝統ある日大アメフットボール部の存亡に関わる大きな事件になってしまったから。

Aは、日大では絶大な指揮権を有する内田監督の指示に従い、忠実に実行した。試合に出たいがための一心だったのだろう。試合早々、ボールを投げたあと、その行方を注視していた関西QBに後ろから、飛び込むように体でぶつかっていった。タックルであり、ボールをコントロールしている選手に対して行う技の一つだが、ボールを投げたあと数秒たってから行うのは無意味だし、明らかに反則だ。身構えもしていない無防備の選手にぶつかっていったことになる。負傷する恐れがあり、現に、そのQBは全治3週間のけがをし、退場した。その後、代わったQBに対しても短い間にこの選手は合計三回反則行為を続け、審判に退場を命じられた。三回目のときには、相手とど突きあいをしていた様子が映像にとらえられている。相手にののしられたりして激高したわけだろう。

その選手が、試合を見守る監督や控えの選手たちの場（テント）に戻ってきたとき、監督らは反則行為を叱責する様子もなく、むしろ〈よくやった〉と賞賛するような雰囲気が見られた。このことも日大チームが世間に非難される大きな理由の一つになっている。そしてAは激高した感情があふれたかのように、片隅で泣き出した――「ウェーン、ボクは退場なんだ。もう試合には出られない。すべては試合に出るためにやっ

たことなのに……。結局、やってはいけないことをやってしまった」

相手チームのＱＢが壊れたならば、断然試合が優位になる。強力なライバルチームに、何としてでも勝ちたいという執念が感じられる。というより、一番安易な手段を使ったわけになる。いわば戦力外の選手が反則退場しても、チームとしては痛くもかゆくもない。彼はチームのために犠牲になって、反則行為をしたわけだ。奇襲攻撃したようなものだ。戦時中の特攻隊を思い起こさせる。（特攻も、人道を無視し、戦果を挙げることだけにこだわった反則攻撃だろう。それいっては彼らの霊がうかばれないけれど）

この事件は、日大の首脳陣、つまり監督・コーチたちが計画的に仕組んだことだ、とわかってきた。彼らは何度かの会見の機会がありながら、指示したという事実を認めようとしない。それは〈自分たちはウソつきだ〉と公言しているようなものだ。証拠がそろっているなら、追求されるままに、本当のところを言ってしまうところだが、彼らはそんな正直ではないのだ。彼らにはウソをついてでも、それなりに守るべきものがあるのだろう。もしも正直に事実を語り、謝罪したとすれば、彼はウソつきというレッテルがはがれてしまい、凡人になってしまう。ウソつきはウソつきのままでいい。

選手Ａは退部処分を免れないにしても、日大はおそらく彼を退学にはしないだろう。自ら開いた謝罪会見で世間の納得を得た。彼は心が折れるほど深く反省しているようだし……。

反省していないのは、あの人たちだろう。今回の事件の首謀者たちだ。でも、彼らは一つ後悔しているかもしれない――〈壊せと言った後に「反則がばれないようにうまくやれ」と言い足せばよかった。バカまじめに背後から突進していくヤツがあるか！〉

---

④塀のない刑務所から逃亡した男

【毎日新聞朝刊 2018/4/12 社会

愛媛県今治市の松山刑務所大井造船作業場から平尾龍磨受刑者（27）が逃走した事件で、潜伏先と見られる広島県尾道市の向島（むかいしま）内では、１１日までに計６件の窃盗被害が相次いだ。容疑者が乗り捨てた盗難車の場所から１キロ圏内に集中している。自転車、靴下、携帯電話、鍵、現金と財布、サンダル１

足など。】

【毎日新聞朝刊 2018/5/1 一面、社会

平尾受刑者、広島のネットカフェ店員が「平尾容疑者に似た男が店を出た」と通報し、警察が広島駅近くで確保。彼の供述「刑務所での人間関係が嫌で逃走した」「島から泳いで本州側に渡った」】

【毎日新聞夕刊 2018/5/2 社会

脱走受刑者、刑務官の叱責が一因か。直前に規則違反が続いた。一般社員の服をふざけて着たり、出所した受刑者の座布団を隠し持ったりした。】

【毎日新聞朝刊 2018/5/3 社会

松山刑務所、平尾容疑者は「刑務官や受刑者との人間関係に悩んでいた」という趣旨のメモを潜伏先に残していた。吉田博志所長「刑務所内にいじめなど人間関係のトラブルはなかった」

ただ以前にも刑務所内の人間関係を原因として受刑者が逃走していたことがあったという。】

【週刊新潮２０１８年５月１７日号

牢名主が証言、「タフガイ脱獄囚」が耐えられなかった「スパルタ獄窓記」】

【毎日新聞朝刊 2018/6/16 社会

愛媛受刑者、平尾容疑者は、新入者に指導できる委員だったが、職員に外された。自治会長から「やる気がないんだったら帰れ」と叱責された。「見せしめのように皆の前で怒鳴られ、立場も一番下になり、居場所がもうない」と父親宛の手紙が残されていた。】

平尾受刑者は４月８日夜、愛媛県今治市の松山刑務所大井造船作業場から抜け出し、車を奪ってから、瀬戸内海を渡るしまなみ海道を北上した。島伝いに向島（むかいしま）まで来ると、車を乗り捨てた。検問にかかる恐れがあったからだろう。向島は、２００メートルほどの細長い海峡を挟み、尾道市の市街が広がっているのが見えるところだ。その島も尾道市に属している。彼はここで空き家などに入り込み、しばらく潜伏してから、２４日の夜、対岸の本州側に泳いで渡った。尾道から広島に行き、３０日正午ごろにその駅近くで確保された。無責任に言えば、警察側の大捜索網をかいくぐってこれほどの長い日数を逃亡していたことに私は感心させられる。その行動は忍者のようだ。サバイバル術に長けている。

ただし、彼は逃亡した後のことをよく考えていなかったようにみえる。行く当てもなく、逃走資金も持た

ず、支援者もいなかったわけだろう。食べ物、着るもの、移動手段など、物品はすべて現地調達しなければならなかった。それらは悪事を重ねることになった。顔写真で手配されれば、全国どこに行っても怪しまれ、結局つかまってしまう。無謀だった。彼にとって逃走したリスクはあまりにも大きい。

平尾受刑者がなぜそんな刑務所から逃亡したのか。逃亡したかった理由は何か。その理由を正確に把握しないと、再発防止はできない。今まで、ここから脱走する囚人が後を絶たないところをみると、それができていないことになる。週刊新潮５月１７日号がその理由をよく説明している。以下はその要点をまとめる形で書いてみたい。

平尾受刑者に「あそこにいるのに耐えられなかった」と言わしめた。あそこことは、松山刑務所の大井造船作業場の敷地内にある、受刑者２０人ほどが暮らす寮のことをさしている。友愛寮という、やさしい名が付けられているが、とんでもない施設だったようだ。松山刑務所の吉田博志所長は人間関係にトラブルはなかったと言い張っているが、あったと私はみている。

この大井造船作業場は、１９６１年に開設された伝統のある施設だ。塀のない刑務所として関係者にはよく知られている。この施設を出た者は再犯率が低いということが、一番の売りになっている。そもそも模範囚が選ばれてここにやって来るのだから、それも当然かもしれない。平尾もそんな一人で、勤務態度や人柄もよかったといわれている。しかし、これまで逃亡した者が約２０名いるというのは、異常に多い数値だ。彼らは、今回のように、何日間も潜伏したり遠くに逃走したりはできなかった。開放的な施設だが、地理的に逃亡するのは難しいし、周囲の監視の目があり、単独行動は許されない。

造船作業場の職場では、その道のベテランの指導係がつき、一般工員と同等な作業を囚人たちに割り当てる。その作業では、難しい技術を必要とするわけでも、重いノルマを課されるわけでもないという。囚人だからといって特別に厳しく指導するわけではないから、その作業が苦痛になって囚人を脱走に駆り立てる要因にはなりにくい。

問題は作業を終えてからのことだろう。友愛寮に帰ると、４人部屋を基本とする規律正しい寮生活が営まれる。社会復帰に向けての準備的な役割があるという。開放的な施設だから、規律を厳しくしている面もある。寮監は刑務官だが、運営は自治組織に任せられている。

その自治組織にやたらと厳しい上下関係がある。軍隊並みの厳格さがあるといわれている。平（ひら）の寮生は、上位の寮生に絶対服従しなければならないのだそうだ。それはあたかも、軍隊で階級の星一つの差で明確な上下関係を規定していたのと似ている。だいたい古参の囚人が役職を持ち、上の位を占める。新入りなどは一番格下の「下期生」としてあつかわれる。

寮には、会長、副会長、会長補佐の三役を筆頭に、役員、委員という役職があり、刑務官と寮生の幹部の話し合いによって選ばれる。この大井造船作業場では、そんな役員たちが刑務官の補佐的な役割を担う。つまり、下期生のしつけ役だ。ここで、寮生の幹部に人事権を持たせていることに注目したい。平（ひら）の寮生は、幹部にこらまれると、上の役職に就けないわけだ。そのため、役職者にゴマをすったり、使い走りをしたりするようにもなるという。役員は下期生に対して、ちょっとしたことで難癖をつけては怒鳴りまくり、V字腹筋やスクワットをさせるなどしてしごきまくる。

彼らに逆らったりすれば、胸倉をつかまれて刑務官の前に引き出されることになる。寮では、幹部たちが、あたかも刑務官のように振舞えるわけだ。囚人が刑務官の代わりになれることには、いくつかの役得がある。あたかも、えらくなったかのように……。囚人が刑務官に怒鳴られることは、よくあることだろうが、ここでは同じ囚人から怒鳴りまくられることが特徴だ。

その上下関係は、人の入れ代わりがあっても、組織として伝承されてきた。そんな上下関係がある組織では、指導と「いじめ」が紙一重になることがよくある。パワーハラスメントになりうる。下位者は、些細なことで上位者に怒鳴りまくられるのだから、緊張が強いられる。たとえば、毎朝の朝礼の際、会長に指名されたものが「大井七則」「五姿勢」「三大目標」をそらんじるルーティンがある。そこですらすら言えなければ、どやされることになる。「**バッカヤロー**、テメー、憶える気があんのか。気がないんなら体で憶えてみろ！」などと……。

模範囚だった平尾がそんな環境に移されたのは、昨年の１２月。一度委員になり、指導的立場にいたが、外され、一番下位に下げられた。この措置が彼にとって相当なプレッシャーになったと思われる。おそらく、何かのきっかけで平尾は上位者にこらまれた。その前にいたところでは平尾が刑務官に怒鳴られことは少なかったと思われるのに、ここでの寮生活は、周りの囚人から怒鳴りまくられることになる。いじめの標的に

なったわけだから、我慢できなくなった。
平尾は3～4月に些細なことで刑務官から厳しく叱られた経緯があったと報道されているが、その内容からして上位者たちの告げ口によるものではないか、と私は想像する。そのときの平尾の気持ちを考えると、「オレが刑務官に叱責されるのが、そんなにうれしいんか。同じ仲間のはずのオレの足を引っ張るなんて、何ていやなヤローたちだ。オレには耐えきれん！」
この寮には、模範囚よりも、むしろ札付きの囚人が入るべきところだろう。ただし、そんな者が「会長」になったならば、江戸時代さながらの「牢名主」が出現することになるのだろう。

---

⑤狛江市長のセクハラ認識

【毎日新聞夕刊 2018/5/22 社会
狛江市長がセクハラ、水野穣副市長が2人へのセクハラが確認されたとの調査結果を発表し、市長に辞職を迫ったことを明らかにした。2014年4月から16年3月に「車の中で手を触れられた」「腰に手を回した」との内容が確認できたという。18日の庁議では石森準一参与が約2年前から市長に対しセクハラしないように再三忠告し、高橋都彦（66）市長も「気をつける」と言ったことに言及した。】
【毎日新聞朝刊 2018/5/23 社会
狛江市長・高橋氏、一転辞意。市の調査で2人の女性職員にセクハラ行為をしたと認定された問題で、22日辞職する意向を示した。21日まではセクハラを否定していた。女性職員4人から具体的な被害を訴える実名の抗議文を突きつけられて追い込まれた。迷惑行為が1年にわたり続いた被害を列挙し、「今まで沈黙していたが、もう我慢できない」として高橋市長に事実を認め、謝罪するよう求めた。】
【毎日新聞夕刊 2018/5/23 社会
狛江市長「私の認識とずれがあるが、セクハラだというのなら認めます」「私のやったことがセクハラのレベルにあるとは思っていない」】
【毎日新聞朝刊 2018/5/24 社会
狛江市長が示威を正式表明した。「私としてはセクハラと認識できるものはない」
被害者に直接謝罪することは、被害者に拒否された。彼女らは「被害を受けたのは私たちだけではない。抗議文に書いたように公に謝罪してほしい」と断ったという。抗議文に列挙されたものとして「車内で

手を握られた」「お尻を触り続けられた」】

【毎日新聞朝刊 2018/6/5 社会

狛江市長が議長宛で「一身上の都合」を理由に辞職願を提出。4日の市議会には出席せず、「ハラスメントと受け止めた職員に謝罪します。市政を混乱させたことに対し、市民にもおわびします」とのコメントを出した。市議会では全会一致で同意した。】

女性職員たちに指摘されているセクハラといわれている言動が、狛江市長高橋氏の場合、迷惑行為とは考えていなかった節がある。女性職員たちと市長との間には、セクハラ認識の違いがある。正しく認識しているのは女性職員たちだろう。高橋氏は楽しんで触ったりしているが、触られたほうはいやだったが、強く拒絶できなかった事情がある。

女性たちは、それを受けてずっと我慢してきたというが、「止めてください！」という明確な意思表示をしただろうか。たとえば、あなたが触られてイヤならば「触らないで！」（Ｄｏｎ，ｔｔｏｕｃｈｍｅ！）とぴしゃりと言えば、男はすぐに手を引っ込めたのだろうし、もうそれっきりにしたはずだ。言葉で言わなくても、振り払うなど、拒絶のそぶりをすれば伝わるはずだ。

声を上げなかったために、わいせつとまでは言えない些細なことでも、つもり積もれば、鬱憤になってしまう。狛江市の場合、市長に遠慮してか、市長の機嫌を損ねてはまずいと思ったか、市長の仕返しが怖かったためか、誰一人声を上げなかったために、複数の女性が被害にあったのだろう。市長はそれがセクハラだとは気づかずに……。

受動側の意思表示があいまいだと、狛江市長のように「こんなこと、女性たちも嫌いじゃないのね」などと、勘違いしてしまう。おそらく、彼にとって女性職員たちへのセクハラ行為は、あいさつ代わりのことだったのだろう。

声を上げる難しさがある。されるがままに、長年しのんできたようにみえる。しかし、もはや許容できないレベルに達し、ここへ来て、ほとんど突然に、女性たちがいっせいに「市長、それはセクハラです！」と声を上げた。それまで女性一人が叫んでも、市の組織内では無視されていた状況がみえる。複数女性の告発により調査した責任者の副市長がセクハラを認定したから、市長は辞職せざるを得なくなった。セクハラを止めるだけではすまなくなった。セクハラの認識のな

い彼だから、市長を辞めたとしても、それを続けるかもしれない。ただし、市長だから、その権限を利用して部下の女性職員に手を出していたところがある。もうその役得はなくなる。

ノーと言えない日本人だ。あからさまな拒否はしない。特に上下関係があるような職場では、そのうち止めるだろうという淡い期待を持ちながら、黙っていることが多い。拒否は相手に失礼になると思うし、相手が怒り出す可能性がある。上位者を怒らせると、損になることがほとんどだ。下位者の悲しさだ。相手が権力を振るってくると、対抗できない。

それは日本女性だけでなく、世界的な傾向だったようだ。人材を登用する決定権などを持つ上位者が、交換条件を持ちだして性的関係を迫ろうとする。しかし、近頃「それはセクハラだ」と声を上げるようになった。映画界や芸能界で「過去にセクハラがあった」と告白し始めた。＃ＭｅＴｏｏというハッシュタグで、「私もセクハラされた」と名乗り出ることが流行にもなっている。声を上げれば、慰謝料や示談金を支払われるかもしれないから、損はない。

狛江市の女性たちもようやく声を上げた。副市長が調査に動いたのは、２人の女性が内部告発的文書を書いたから、発覚した。それが認定されても、市長が否定するから、最近になって４人の女性が抗議文を突きつけた。騒ぎが大きくなって、市長が辞任しなければ収まらなくなったわけだ。

彼はもう2年も前にセクハラをしないように忠告されていたということがわかった。そのとき彼は了承したというが、どうも、その場限りの片事をしただけだったことになる。彼の場合、忠告ぐらいではセクハラを止められなかった。ということは、かなり以前から、やっていたことになる。地位が高まるにつれ、やりやすくなり、大胆になったようだ。この市長は、女性たちが何されてもじっと耐え忍んでいるのを見て、〈女性の横に座れば、手を出す〉ということを繰り返していたことが伺える。

つまり、彼はセクハラとうすうす認識していながらも、これは迷惑行為ではないと彼自身に言い聞かせて、触り続けた。女性たちが強く拒絶しないものだから、いい気になって、確信犯的に繰り返していたわけだろう。市長の職を辞めざるを得なくなる前に、セクハラを止めていればよかったのに、という仮説の話になる。高橋氏は後悔しているだろう。つい数カ月前まではセーフだったのに、今ではアウトになってしまったと嘆

いていることだろう。そして、おさわりを止められなかった自身の性癖をのろいたいところだろう。

---

⑥自転車と歩行者の殺傷事件

【毎日新聞夕刊 2018/5/25 社会
千葉県流山市の路上で4月、同市の男性（58）が背中を刃物で刺された事件で、現場近くに住む清水麻美容疑者（33）を殺人未遂容疑で逮捕した。4月20日午後6時45分ごろ、自転車に乗っていた容疑者が路上で男性とすれ違いざまにトラブルになり、口論したといい、「腹が立って刺した」と容疑を認めている。】

【毎日新聞夕刊 2018/6/7 社会
昨年12月12日相模原市南区の路上で、近くに住む松岡隆行さん（当時60）が刺殺された事件で、神奈川県警は同市内の男を殺人容疑で聴取する。同日午後11時半ごろ、帰宅途中の松岡さんが道路で倒れていた。腹部など数カ所の刺し傷があった。現場はJR古淵駅に近くで松岡さんと男が大声を出してもみ合う様子や、刃物を振り回していた男が自転車に乗って南へ逃げるのを通行人が目撃していた。2人が通行を巡ってトラブルになった疑いがあるとみている。】

自転車と歩行者のトラブルで、刃物による殺傷事件が続いておきたことに注目したい。

流山の場合、互いに激高した後、女は自宅にいったん戻り、刃物を手に取り（おそらく台所から包丁を持ち出して）言い争った歩行者の男性の背中を刺して重傷を負わせた。

相模原でも、二人がもみ合いになるけんかになり、自転車に乗っていた男が刃物を取り出し、歩行者を刺し殺したのだから、すさまじい。

歩行者にとって歩道を歩くことは必ずしも安全ではない。歩道を走ってくる自転車があるからだ。自転車のほうにも、自転車が車道を走るのは危険だからという理由があるのだろう。歩行者としては、後ろからすっと追い抜く自転車には、恐怖すら感じてしまう。特に暗い夜にうしろから来られては怖い。

歩行者が歩道を気まぐれに斜行しようものなら、ドンと自転車にぶつけられる危険がある。私事ながら、ときたま、朝の8時ごろの時間帯に駅に向かって歩道を歩くとき、私は後ろから来る自転車が気になる。こ

の歩道は下り坂だから、自転車が後ろから加速して音もなく走ってくるから怖いのだ。彼らは駅前の自転車置き場に預けて電車に乗るのだろう。逆に駅から、丘の上にある学校などに通う生徒たちの集団が道幅いっぱいに広がって歩いてくることもあるから、互いに通りにくい。

幅の広い歩道でも、危険はある。そんな歩道は自転車も走りやすいから、スピードを上げてくる。後ろから来る自転車に歩行者は気づきにくい。私の経験で言うと、自転車に乗る人の多くは、歩行者にかすった程度の接触では謝りもせず、無言ですっと行ってしまう。そんなとき、遠ざかる自転車に地団駄を踏みながら、いくら冷静な私（？）でも怒りたくなるものだ。

そんなとき、気の強い人ならば、「**あっぶねぇじゃないか、気をつけろい！**」ぐらいのことを言うだろう。怖い思いをした歩行者が怒声を上げ、怒(いか)りまくるのだ。自転車の方も、そんな歩行者に対し、つい言い返す。「ナニー、そんなに怒鳴らなくてもいいじゃないか！」

自転車に乗っている者としては、相手がなぜ怒鳴りまくるのか、よく理解していない。そんなおこられる筋合いではないと思っている。歩行者とは十分に間隔をとって走ったのに、危ないと言われては、心外だ。自転車を止めると、互いにムキになって、ケンカに発展する。「何だよー、自転車に乗って悪いかよー」「悪いんだよ、おお悪だ」「こんちくしょーめ」

路上トラブルになる。取っ組み合って、腕力ではかなわないとみるや、非力(ひりき)な者は刃物で対抗するしか考えられなくなる。ある意味で、刃物を持ち出すのは護身であり、防衛のためなのだ。「**てめー**、やりやがったな。**このやろー**、こうしてやる！」 **グサッ**

---

⑦茅ヶ崎駅前の国道で信号無視した赤い車

【毎日新聞朝刊 2018/5/29 社会

５月２８日１１時ごろ、神奈川県茅ヶ崎市元町の国道１号の交差点で、同市の無職の女が（90）が運転する乗用車が歩行者４人を次々とはねた。５７歳の女性が死亡し、運転手を含む４人が負傷した。女は「赤信号と分かっていたが、歩行者が横断歩道を渡り始めていなかったので行けると思った」と話している。乗用車は交差点から約１０メートルの自動車修理店から国道に出た。自動車修理店によると、女は旅行の土産を届けに来た、杖を突いているが会話などはしっかりしているという。】

【毎日新聞夕刊 2018/5/29 社会
茅ヶ崎１人死亡事故、運転の９０歳女を逮捕、自動車運転処罰法違反（過失致死傷）。容疑を認めているという。［その後、３０日に釈放された］】

赤信号の交差点に加速して進入し、通行中の歩行者６人（横断中４人、歩道にいた２人）をはね、そのうち一人の女性を死亡させたのだから、大きい事故だ。高齢者の運転による事故の典型のように扱われ、センセーショナルに報道された。

なぜこの事故が起きたか、考察したい。原因として考えられることを列挙してみよう。

・運転者が高齢であること

高齢になれば、どうしても知力体力が衰える。他の年代と比べて高齢者の事故発生率が高いという統計が出ている。年齢とともにそれが高くなるのだから、ときどき車を運転する私としても気が重い。危険を察知するための感覚器官、主に視力が衰えるし、それを回避する判断や動作が遅くなる傾向がある。しかしながら、高齢者には〈他人はともかく、自分は気をつけているから大丈夫だ〉などという思い込みが強いことが知られている。〈運転暦も長いから、事故を起こさない自信がある。運転なんて、交通法規を守っていれば、だいたい安全なんだ〉とも思う。

・早く発進しようという気のあせり

運転者は、なじみの自動車整備会社（自動車修理店）の店員に、旅行の土産を渡すために立ち寄ったという。彼女は気配りのある人なのだ。それを渡して車に乗り込んだとき、その店員が見送りに出た。店頭に立っていた。それを見て、彼女は立たせたままではいけないと思い、早く車を発進させた。「待たせては悪い。早くこの場を立ち去らねば……」という気の焦りがあったのだ。〈気配りのできる人ゆえの焦り〉とも言える。整備会社から出るとすぐ交差点がある。店頭に立っていた人は、自分が事故に影響したとはまったく考えていないだろうけど……。

・交差点に進入したとき信号は赤だった

信号は赤だったが、交差点上には車も人も見えなかったから、あせっていた彼女は車を加速させて通り過ぎてしまおう、と考えた。信号が黄色から赤になった瞬間なら、走りぬけることもできたかもしれない。左右側の信号が赤から青（緑）になって、車などが進入してくるまでに数秒間、空白の時間があるからだ。

つまり、信号が黄から赤に変わったことを視認して

いたら、セーフだったかもしれないが、信号が赤のままであるのに、交差点に入ったのは完全にアウトなのだ。

・車の性能を過信した？

事故車は、セダンタイプの赤い車で、もう発売されていないモデルだから、年式はそうとう古いはずだが、見た目はむしろ新しい。運転者はこの車を長く愛用し、乗り慣れていたのだろう。トランクの上に「リアウイング」をつけているのは、若者好みの当時流行したオプションだ。スポーツタイプの車で、加速性能がよいのだろう。性能を過信して交差点に進入したとも言えそうだ。「加速して走り抜けてしまおう」とは、かなり若者的発想だ。

・歩行者に気づいたときの操作

〈車の進行方向に、歩行者の群れが出てきた。**このままではぶつかる！**〉

運転者はハンドルを切ってよけようとしたが、車の向きを変えたその先にも、歩行者がいた。もうよけきれなかった。横断歩道の歩行者だけでなく、歩道上にも乗り上げ、通行人をはねた。自転車に乗っていた女性（57）を押し倒したことで死亡させた。

進行方向に何かしらの物体があり、そのまま車を走らせればぶつかる危険があるなら、まずはブレーキを踏むことだろう。急ブレーキをドカンと踏めば、それなりに車は止まるし、物体にぶつかったとしても、スピードが落ちるから衝撃は和らぐ。ブレーキを踏まなかったこと（あるいは、踏み遅れた）が事故を大きくしたことになる。

数日で釈放されたのは（横浜地裁が横浜地検の勾留請求を却下した）、おそらく情状酌量があったのだろうが、この運転者は深く後悔していることだろう。彼女の心の中で「あのとき信号が赤だったから、車を止めていれば……」という思いが繰り返されていることだろう。取り返しのつかないことをしてしまったことで、人生の晩節を汚してもいる。自分よりずっと年下の女性を死なせている。「先に死ぬのはテメーの方だったんだろ」という罵声が聞こえてきたりして……。

---

⑧塩を多量に口に入れられた女児

【毎日新聞夕刊 2018/1/26 社会

盛岡市で２０１５年８月、認可外保育施設に預けられた下坂彩心（したさかあこ）ちゃん（当時１歳）が塩化ナトリウム

中毒で死亡した事件で、盛岡簡裁は業務上過失致死罪での略式起訴で「略式命令を出すのは不相当」とした。これによって正式裁判へ移行する。

盛岡区検は、腎臓などの機能が十分発育していない彩心ちゃんに食塩入りの乳児用イオン飲料を飲ませ、塩化ナトリウム中毒で死亡させたとして元経営者を略式起訴していた。】

【毎日新聞朝刊 2018/6/1 総合・社会

幼児塩中毒死で、被告は出廷せず、虐待否定の答弁書を出した。

訴状によると、彩心ちゃんの口には無理やり塩を飲まされたと見られる外傷があり、５～５０グラムの塩を投与されたと推定される。原告側は「通常あり得ない塩を投与し、事実を隠したなどから、虐待は明らか」と指摘した。】

１月の報道があったとき、乳幼児の塩分の摂りすぎに注意することが、われわれの教訓になると思った。この事件が発生する前は、塩中毒で亡くなった例は知られていなかったから、これで初めて知られたといっていいだろう。専門知識のある保育士でさえ中毒死させたのは、まれなケースかもしれなかった。それにしても、多少の塩分の取りすぎで中毒になるのは、体質的に弱すぎないか、と私は失礼ながら思ったものだ。乳幼児に塩分の濃いような飲料や離乳食はだめなのか？

私は当初〈塩分の取りすぎで乳幼児が死亡するとは保育施設での珍しい事故だ〉ぐらいに思っていたのだが、この後の報道で、虐待の疑いがあることがわかってきた。検察の「食塩入りの乳児用イオン飲料を飲ませた」という主張も、確証があるわけではないだろう。なぜ、わざわざ乳児用イオン飲料に食塩を入れたのか、理解しがたい。意味のない行為だからだ。

状況を推測すると、おそらく、泣き叫ぶ幼児にこの保育士は、手のひらにいっぱいの塩を盛って、無理やり幼児の口に入れたのだろう。それは泣き叫ぶのを止める目的と思われるのだ。口をふさぐ意味だ。しかし、幼児にとってはあまりに多きずる量であって、塩中毒になって死んでしまったわけだ。泣き叫ぶのを止めるという目的は達せられたが……。

この裁判ケースでは、口の外傷が〈無理やり塩を飲まされた（食べさせられた）〉ものによると推定できるかどうかにかかっている。もしそうだとして、この保育士は、幼児にとって塩が毒になることや、塩中毒

になって死ぬことなど、考えていなかったろうから、このケースは過失致死に近いのだろう。塩加減に失敗したことになる。

しかし、塩を口に入れた動機や手段は、「虐待」の言葉が当てはまる。塩を大量に口に含ませたとすれば、暴行になる。多量の塩を口に入れられるのは、大人でも、たまったものではない。この幼児は保育士の手のひらで口を塞がれ、吐き出しもできなかったのだろう。あまりのショックで幼児は泣き止んだりして……。一回だけでなく、数回に渡って行っていたのかもしれない。複数回にわたれば、過剰に塩分を摂取することになる。そうなると、単なる過失ではなく、殺人に近い行為ということになる。でも、現場の物的証拠からそれを証明するのは難しそうだ。

「塩分の取りすぎ」になる前に、この女児はどうして泣き止まなかったのか、を考えると、女児が実の母親から引き離され、居心地のよくない保育施設に連れ去られていたため、と私は推測する。自分の母親がいないから、恋しくて泣いていたと考えられないか。1歳にもなれば、自分の母親を識別できるだろう。自分の母親の顔は菩薩の顔に見えても、保育士の顔など鬼に見えてしまうと考えられる。

母親が1歳の幼い子を保育園に預けるのは、働きに出るためというのが大方の理由と思うが、このような事故（事件？）をうけて、やはり3歳までは母親が顔の見える距離で育てるべきという「神話」が復活してくるかもしれない。

---

⑨目黒・女児が残した悲痛な詫び状

【毎日新聞夕刊 2018/6/7 社会

東京目黒区で船戸結愛（ゆあ）ちゃん（当時5歳）が死亡した事件で、父親の雄大（33）と母親の優里（25）両容疑者が目黒区に転居した1月以降、結愛ちゃんが外出した形跡は1日のみ、軟禁状態だったか。父親が2月下旬に殴った後、結愛ちゃんは3月2日に息をしていない状態で病院に搬送された。同年齢の子の3分の2に満たない体重だった。容疑者たちは結愛ちゃんに食事を1日1食、風呂場で冷水を浴びせた。早朝に1人で起き、ひらがなの書き取りをしたり体重を量ったりするよう命じていた。2月20日ごろまで続いた。雄大容疑者は「太ってきたのでやせさせようとした」と供述。】

【毎日新聞夕刊 2018/6/9 社会

目黒・虐待死の結愛ちゃんは「こころの叫び」をノートに書いていた。
「ママ、もうパパとママにいわれなくてもしっかりと　じぶんからきょうよりか　もっともっとあしたはできるようにするから　もうおねがいゆるしてゆるしてください　おねがいします　ほんとうにもうおなじことしません　ゆるして」
「きのう　ぜんぜんできてなかったこと　これまでまいにちやってきたことをなおす　これまでどんだけあほみたいにあそんだか　あそぶってあほみたいだからやめるので　もうぜったい　ぜったいやらないからね　わかったね　ぜったいのぜったいおやくそく　あしたのあさは　きょうみたいにやるんじゃなくて　もうあしたは　ぜったいやるんだぞとおもっていっしょう　けんめいやって　パパとママにみせるぞというきもちで　やるぞ」】
【毎日新聞朝刊 2018/6/10 社会
目黒・虐待死で、雄大容疑者「勉強しろといったが、寝ていたので暴行した」「小学校の入学に向けた勉強を先にやれといったら『はい』と言ったのに、昼ごろに部屋を確認したら寝ていたのでかちんときた」】

【毎日新聞朝刊 2018/6/27 社会
目黒虐待死、船戸結愛ちゃん（当時５歳）が虐待の末に死亡した事件で、結愛ちゃんは香川県の児童相談所に一時保護されたころ、「パパ・ママいらん、前のパパがよかった」と口にしていた。
２０１６年４月、雄大、優里が結婚、８月２５日、近所の住民が泣き声を聞き、児童相談所に通報、１２月２５日、自宅の外に放置され、けがも確認される。警察に「パパにたたかれた」、１２月２６日、児相が１度目の一時保護
２０１７年２月１日、香川県警が雄大容疑者を傷害容疑で書類送検、３月１９日、再び外に放置され、けがもあり、児相が２度目の一時保護、３月末、幼稚園を退園。】
【毎日新聞朝刊 2018/6/28 社会
目黒区５歳児虐待死で、両親が起訴された。女児の衰弱を放置。発覚を恐れ病院に連れて行かなかった。３月２日、女児は肺炎による敗血症で死亡。】

結愛ちゃんがノートに書いた文章は、追い詰められた末の、極限の叫びだろう。悲壮な決意表明までしている。言葉を繰り返すことには「言葉を一つ書いただ

けではわかってもらえない」という不安感がにじみ出ている。

この女児の死因は、病死だ。しかし、両親は呼吸が止まるまで病院にも連れて行っていなかった。虐待死とみなすべきであり、多くの報道もそう表現している。虐待したのが義父と実母の二人だ。オニのようなバカップルの一例だ。

虐待死を防ぐことができなかった周囲の者たち、子の養育に手助けできたはずの親戚縁者、助言できたはずの友人・知人、そして、虐待を見聞きしていた近隣の住民たち、通報を受けた警察や児童福祉に関係する人々は、何をやっていたのだろうか、と私は憤りを覚える。

女児の報道された写真を見たところ、愛らしい女児であり、悪ガキの印象は少しもない。虐待される前の写真だろうし、その後の写真は撮られていないようだ。しかし、特に義理の父親である雄大にとって、女児は、ぜんぜん愛せない、腹立たしいだけの存在だったのだろう。女の連れ子であり、女の過去をひきずっている、目障りな存在だったようだ。

女にとっても結婚に失敗した「象徴」のような女児であり、子連れのためにろくな職に就けず、生活にも苦労したのだろう。頼るべき親族もいなかったようだ。若い彼女にとって結愛ちゃんは望まれて生まれてきた子であったのか、疑わしい面がある。今度の男とはうまくやりたい、また結婚に失敗したくない、この男との間に男児も生まれたから、男の多少の身勝手さや冷酷さは黙認しなければならない、という思いがあったとも考えられる。そんな男に従属的であったかもしれない。そうであっても、実の親らしい行動をせず、虐待に加担したのでは、冷たすぎる。

この女児を傷つけたことで2度も書類送検されたことが、雄大にとって、にくにくしい――「オレがしつけとしてやっているのに、やつらは虐待だといいやがる！　結愛がオレの言うとおりにしないことがすべての原因だろう。結愛が泣くから、近隣のやつらが騒ぐ。前のパパのほうがよかったなんて、**しゃらくせぇ！**」

雄大は、結愛ちゃんの体に冬でも冷水をかけた、と報じられている。水攻めをしていたわけだ。あるいは、長日間、風呂にいれず、体が臭(にお)うようになったから、水浴びさせたのだろうか。そして、たびたび寒空の下、裸足で野外に立たせていた。

このバカップルは、下の男児を連れて3人で外食に行ったりしている。家に一人取り残された結愛ちゃん

は、ひもじい思いをするだけでなく、そうとうな疎外感を味わったことだろう。「わたしはこの家の子ではないの？」　バカップルには想像もできない心情だろうけど……。おそらく、彼らは虐待したことに気づいていない。

雄大が結愛ちゃんに対する障害容疑で書類送検されるたびに、結愛ちゃんは2度、児童保護施設に入れられた。それは数カ月間の一時的だった。年少の弱者である結愛ちゃんにとって保護施設も居心地のよいところではなかったかもしれない。おそらく本人の希望もあって、しばらくして保護施設から家に戻された。するとまた、すぐに雄大の虐待が始まったと推定される。書類送検された恨み（結果的に不起訴だったが、警察や検察官にそうとうネチネチといやみを言われたはず）を晴らすかのように、すぐに……。逆恨みだろう。この男には、周囲の親切な、あるいはおせっかいな警告や忠告に聞く耳を持っていなかった。

家に戻されてまもなく、また虐待が疑われるあざなどがあったことが、病院でも診断された。しかし、以前は「パパに殴られた」などと証言していたのに、今度は結愛ちゃんは関係者に何も言わなかった。そのため、児童保護施設には入れられなかった。結局、雄大も3度目の書類送検はされなかった。

結愛ちゃんは一時的な保護ではなく、こんなバカップルから引き離し、長期的な保護施設入所が必要だったと思えるところだが、私は、結愛ちゃんが雄大に硬く口止めされていたから証言しなくなった、と推定する。雄大は結愛ちゃんの証言で書類送検されることがもう分かっていたから、結愛ちゃんに「なぜアザがついたの？と、だれかに聞かれても、『パパに殴られた』なんてことは絶対に言うな、言ったらメシ抜き、ハダカで冷水だぞ、いいな、わかってるな！　パパとのお約束だ」と脅したのだろう。約束したのではなく、脅迫されていたと解釈できる。この男は女児に虐待をするだけでなく、自分に都合のよいことを教え込んでいたのだ。児童相談所の職員たちの中に、結愛ちゃんがなぜ証言しなかったかを疑問に思った者は一人もいなかったのか。

雄大は、結愛ちゃんの体重が少ない理由を「太ってきたから、食事を減らした」などと屁理屈（へりくつ）で答えている。彼らは一日一回の食事しか与えていなかった。その食事の質や量にしても、そうとうに怪しい。おそらく、食べ方が卑しいと言っては、男は怒鳴りまくり、手も上げていた。――バシン、「オメー、イヌのよう

にがつがつ食うな、あしたはメシ抜きだ！」
　このバカップルは、小学校に行く前の一年間、結愛ちゃんを幼稚園に行かせていない。今では幼稚園に行くことは義務教育のようなものではなかったか。その間、結愛ちゃんを家から出さず、ほとんど外で遊ばせていない。結愛ちゃんは「外で遊ぶな！」と言われていたから、もう何日も、家の中に閉じこもっていた。それでも結愛ちゃんがたまに外へ出れば、約束を破ったといって、殴りつけた。この時期は、同年代の子たちと遊ぶことが一番の教育だろう。結愛ちゃんのアザや傷がおせっかいな人たちに見咎められたくなかったことが理由だろうが、雄大は自分が義理の娘を徹底的に教育すればいい、と考えた節がある。その間にやらせていたのが、例の〈ひらがなの書き取り〉だったわけだ。それは小学校に上がってから習うものだろう。雄大は「幼稚園の代わり、オレがちゃんと教育している」と言い訳したかったのだろう。
　私は、雄大を弱者に対して威張りたがる人物の一人とみる。「オレがしつけてやる！」という上位者意識がある。彼らは「甘やかして育てると、ろくなものにはならない」という理由を付けて下位者をしごく。小さいうちにしつけなければならないと思い込む。そもそも、しつけというのも大義名分であり、自分の暴力を正当化している。
　その力を振り回すことで、自分が上位者であることを自覚したいだけだろう。リーダーとして男らしく振舞うことが、一つの快感になる。彼の場合、３３歳という年齢的にも、指導的立場として振る舞いたいという願望があるのだろうが、それができるは幼い子どもに対してだけだ。社会では、たいてい上位者がいるから、頭が上がらない。自分より下の者を探すのが難しい。その鬱憤を晴らすのに、格好の標的がいた。

　――２０１８年２月２１日、結愛ちゃんは、朝から書き取りの練習を命じられていたが、暖房のない小部屋で寒さに震えていたから、はかどらなかった。昼になって小休止のつもりで横たわった。彼女はこの３月末には６歳になろうとしており、４月には小学校に入学するはずだった。しかし、入学の手続きがされず、ランドセルすら買ってもらえなかった。
　男が部屋に入ってきた。働きに行きもせず、それまで布団の中で惰眠をむさぼっていた雄大だった。寝ている結愛ちゃんに怒鳴りつけ、「また言いつけを守ってないな、オメーは朝、『ハイ』と返事をしたじゃな

いか、オレをなめとんのか！　このオレに平気でウソをつくんか？　返事だけすればいいと思ってんか？　約束を守らないような、大ウソつきは……『バッシン』、こうなるんだ」

激高した男は、だるそうに座りなおした結愛ちゃんの顔をおもいっきりぶん殴った。この男には、手加減するという心のブレーキもない。一回殴っただけでは気がすまないから、何度でも顔を殴った。

「このアホンダラー」　バシン、ビシン、ドスッ、ガツン、ビタン……

ハーハーと荒い息を吐きながら、男は捨て台詞のごとく言い放つ。「もうオメーに食わせる飯はねぇ！」

今までも1日に1食しか与えなかったのに……。女児は「もう許してもらえない」という絶望感に陥りながら、しばらくすると意識が遠いた。もう座っていることもできず、横たわった。毎日の書き取り練習が途絶えた。結愛ちゃんの身に異変が起きていた。実は結愛ちゃんは肺炎を患い、体力も落ちていた。

遅く起きてきた男が、また逆上した。「このガキー、またサボりやがって……」　ビシン、バシン

体はぐんなりし、眠っているような状態だったから、殴っても効果がなかった。男は、その体にすこし熱があるのに気づいた。「暑いのか？　それなら裸で寝ていろ！　こどもは風の子だ！」　男は着ているものを全部ひんむいた。

傍らにいた母親が口を出したのを受けて、

「ナニー、風邪を引いたのかもしれないから、病院へ連れて行ってはどうかだと？　アホなこと言ってるんじゃねぇ、また警察に通報されるじゃないか！」

それから、結愛ちゃんは意識朦朧とし、ほとんど寝たきりになった。下痢をしていたが、トイレにも行けなくなり、垂れ流しになった。床が汚れるから、母親の手でオムツをつけられた。

3月2日の朝、結愛ちゃんは呼吸をしていなかった。病院に搬送されたとき、オムツ一つの裸の状態だった結愛ちゃんの体は痩せ衰え、細い手足が伸びていた。両足は、家外に締め出されたために凍傷になっていた。両目付近には打撲のあと、体にはアザがついていた。かつて写真に撮られたときの面影はなかった。

――これは私のイメージであり、見てきたことを書いたわけではないが、「当らずとも遠からず」と私は思っている。

---

⑩麻生太郎氏・近ごろの妄言録

【毎日新聞朝刊 2018/3/21 総合
麻生氏「佐川前長官は……」
呼び捨てを改める。「態度が尊大だ」などの意見が出ていた。】

【毎日新聞朝刊 2018/4/14 総合
財務省の福田淳一事務次官が複数の女性記者にセクハラ発言を繰り返したという週刊新潮の報道について、麻生財務相「事実とすれば、セクハラという意味ではこれはアウト」
その後、週刊新潮は福田氏の発言とみられる音声データを公開した。「証拠」を突きつけられた格好で、今後の対応が注目される。】

【毎日新聞朝刊 2018/5/6 社会
麻生財務相「セクハラ罪という罪はない。殺人とか強制わいせつとは違う」「福田氏の人権を考えないといけない」】

【毎日新聞夕刊 2018/5/11 総合
麻生氏、福田淳一氏のセクハラ問題で「はめられたという見方がある」と改めて言及した。】

【毎日新聞夕刊 2018/5/17 総合
麻生太郎財務相が14日の衆院予算会議で、野党議員に「自分がしゃべりたいんだよ、この人は」などとヤジを飛ばした問題で、官邸が麻生氏に部下を介して注意を伝えたことを明らかにした。その翌日、「見てくれの悪い飛行機がシンガポールまで無事に飛んでくれることを期待するが、途中で落っこちちゃったら話にならん」】

【毎日新聞朝刊 2018/5/27 総合・社会
財務省文書について「全部読まずに決済のはんこを押していることはある」と麻生太郎財務相が4月11日に発言。】

【毎日新聞朝刊 2018/5/30 社会
森友国有地売却を巡る決済文書の改ざんに関し、麻生氏「（佐川氏の）国会答弁に合わせて書き換えたというのが全体の流れではないか。書き換えられた文書の内容を見る限り、少なくともバツをマルにしたとか、白を黒にしたとかいうような、いわゆる改ざんといった悪質なものではないのではないか」】

【毎日新聞朝刊 2018/6/1 一面、クローズアップ
大阪地裁は佐川氏らを不起訴にした。虚偽公文書作成罪、公文書毀棄容疑では責任を問えなかった。
麻生氏は、これまで「書き換え」と表現してきた不

正行為を「改ざん」とようやく明言した。】

【毎日新聞夕刊 2018/6/4 一面
文書改ざんで、財務省２０人前後を処分する。麻生氏は給与返納へ。】

それを妄言と言っては語弊があるかもしれない。いわゆる失言だ。麻生太郎氏の場合、今に始まったことでなく、ずっと以前から奔放な発言をしている。失言が多い政治家としてナンバーワンだろう。

自分では失言に気づかないのだろう。彼は自分が思ったことを率直に言葉にしている。よく言えば、うそ の言えない実直な性格なのだろう。気兼ねなどしない。そんな性格の政治家は、むしろ信頼できるのかもしれない。

・呼び捨て

麻生氏は記者会見で、「佐川は……。佐川が……」と、呼び捨てで言っていたのに、その後「佐川前長官は……」と敬称をつけるようになったという記事がある。側近の者が「記者の前で、呼び捨てはまずい」と注意したのだろう。呼び捨てにすると、どうしても不遜・尊大な態度に見えてしまうようだ。麻生太郎氏の態度は、部下に敬称をつけようとつけまいと、尊大なのだから、どちらでもよいことだけれど。

麻生氏は財務省のトップなのだから、省内の部下のものに対して、呼び捨てにするのはいいと思うが、佐川氏は長官を辞任したのだから、もう部下ではない。佐川氏は、「森友学園と首相とは無関係だと言い張り続け、財務省が国有地をただ同然で売却した経緯（首相案件として役人たちが忖度したことが明白になっている）を示す決済文書の書き換えを指示したことがわかっている。

・本人が名乗り出ないと、調べようがない

福田淳一元次官のセクハラが女性記者によって告発され、週刊誌の記事になった。「胸、触っていい？」などと取材を受ける条件に女性記者に言い寄っていたことが、ばれてしまった。それが録音されたのだから、「そんなこと、言わなかった」などと言い逃れることはむずかしい。それでも、その記者が匿名だったことで、当初、麻生氏は「調べようがない」として、財務省で確認や調査することを突っぱねた。「そんな告発は信用できない」という意味で発言している。加害者側をかばっているのだから、ほとんどセクハラの共犯者と思えるところだ。結局、福田氏は「アウト」になった。

・セクハラ罪はない

セクハラすれば、罪になる。迷惑行為の一つとして裁かれているから、「セクハラ罪はない」と言い切るのは間違いだろう。麻生氏は、セクハラを軽視し、「些細なことだ、辞任するまでもない」と言いたかったわけだ。

・はめられた

証拠をつかまれたことを麻生氏は「はめられた」と、悔しそうに言っている。セクハラだと訴えられた福田元次官を、麻生太郎氏は擁護している。あたかも福田元次官は被害者だと主張している。言った・言わないの議論になりがちだから、はっきりした証拠をつかまないと、取り上げてもらえない。そうなると、被害者は泣き寝入りするしかない。今まで多くの女性記者がそんな経験があったと証言し出している。証拠がないと、取り上げてもらえないのだから、女性側が録音した手段は正しい。

女性記者がハニー・トラップを使ったという説がある。つまり、女性記者が色仕掛けで次官に近づき、その「動かぬ証拠」をつかんだのだろう、という邪推なのだ。

・女性記者を入れなければいい

なるほど、それなら、セクハラのしようがない。でも、女性の社会進出を阻むような差別発言だ。男の勝手な言い分になっている。女性記者たちの神経を逆なでするようだ。

・全部読まずに決済のはんこを押す

「それを言ってはおしまい」的な発言だ。大臣ともなれば、「一応全部目を通して決済する」ぐらいの言い訳をする必要があるだろう。それでは、死語になっている「めくら判」が復活してしまうだろう。

・見てくれの悪い飛行機

金正恩北朝鮮共産党委員長がシンガポールで米朝首脳会談（６月１２日）に臨むにあたって、北朝鮮からシンガポールに飛行するための委員長専用の航空機のことを「見てくれの悪い」とけなしている。専用機がボロなのをからかっている。落ちてしまわないか、心配しているのだが、これには北朝鮮は最大限の侮辱ととらえることだろう。航空機に搭乗する人に、墜落をほのめかすのは悪い冗談だろう。こういった発言は北朝鮮にも伝わるはずだから、外交上得なことではない。

独裁者一家の三代目・金正恩氏の場合、飛行機が落ちることを心配する人よりも、それを期待する人のほうが世界では多いだろう。見てくれの悪い飛行機とは、

旧ソ連製のイリューシン６２Ｍ型の改造バージョンであり、さすがに旧式だが、それなりに整備されているだろうから墜落の心配は杞憂だろう。言い換えれば、墜落などは期待できない。シンガポールまで直行するための航続距離性能がなくても、どこかで中継すればいいことだ。でも結局、麻生氏のからかいが効いたためか、正恩氏は中国の大型旅客機［トランプ氏のものと同じタイプのボーイング７４７型機］をチャーターした。アメリカ大統領に対抗するための虚栄的な意味もあるのだろう。

・改ざんじゃない

森友に国有地を売却した際の決済文書が改ざんされた問題で、麻生氏は、「改ざんではなく、単に書き換えただけだ」と言い張り、その不当性を認めなかった。改ざんという言葉には、不当に書き換えるという意味があるから、彼としてはその言葉を使いたくなかったわけだ。佐川氏の国会答弁に合わせて書き換えたのは、彼にとって、書き換える理由として妥当な範囲内なのだ。

・辞職しない

財務省では次官や長官の資質の問題や、組織的な決済文書などの改ざんが明らかになった。部下の不始末・不祥事は、トップが責任を取って辞職するのが、このところ日本の社会では慣例になっている。それがいいとは私は必ずしも思わないが、「麻生氏は責任を取っていない」と痛烈に批判されている。財務省トップの責任の取り方として、麻生氏は大臣の給与を返納することを選んだ。「大金持ちの麻生氏のことだから、給与返納ぐらいでは、痛くも痒くもない」とも言われている。それは形だけの責任の取り方だろう。引責辞任は不名誉なことであり、彼のプライドが許さないことなのだろう。

・新聞を読まない若い世代から自民党は支持を得ていると主張

ネットの記事によると、６月２４日、麻生氏は新潟・新発田市での講演会で、３０代前半までの若い有権者層で自民党の得票率が高かったことを踏まえ、「一番新聞を読まない世代だ。読まない人は全部自民党（の支持者）だ」と述べた。それは統計上正しいことなのだろう。それを持ち出したのは、おそらく麻生氏は新聞には偏向記事が多いと思っているからで、新聞や記者を嫌っていることに関係している。特に、彼は特定の新聞社を嫌っているところがある。「記者は、あることないことを書き立て、政府あるいは、安倍やオレ

の批判ばかりとしてる」と思っているのだ。若い人はそんな新聞を読まないほうがいいと示唆しているわけだ。あるいは「善良な自民党員は、ろくでもない新聞を読まない」ことを誇りにしている。

「新聞はオレたちがやっていることにいちいち批判するな」と開き直っているかのようだ。あるいは「耳の痛いことを言わないでくれ」ということだろう。対応に窮するから……。

---

⑪若い巡査が発砲したわけ

【毎日新聞夕刊 2018/4/14 社会

滋賀発砲、交番勤務の１９歳巡査が巡査部長を射殺。二人が河瀬駅前交番に配属されたのは、事件半月ほど前の３月２６日。巡査は調べに対し、指導役の井本巡査部長に不満をもち「怒鳴られたからやった」と供述。】

【毎日新聞朝刊 2018/4/20 オピニオン

滋賀の警官射殺事件で１９歳巡査の実名で対応が割れた報道。

井本光巡査部長（41）が後頭部と背中から血を流して死亡していた。１１日午後８時ごろ、防犯カメラに突然倒れた様子が映っていた。直後に巡査が正面のドアから出て行く様子。】

【毎日新聞朝刊 2018/5/3 社会

滋賀警官射殺元巡査を家裁送致。

「書類の訂正を何度もさせられ、理不尽で嫌がらせを受けていると感じた。事件直前に書類作成の指示を受け、ストレスが一気に爆発した」と供述しているという。事件直前、井本警部（巡査部長から２階級特進）が机に向かって仕事をし、元巡査が歩き回る様子が映っていた。】

元巡査の少年（ただし、まもなく二十歳になった）に、理不尽で嫌がらせを受けていると感じさせたのは、「書類の訂正を何度もさせられたこと」だった。書類の訂正は、もちろん正当な理由があってのことだろうが、発砲する要因になるとは考えられないとする向きが多いことだろう。でも私は、ありうることだと考える。多くの人は、たとえ発砲したくても、ピストルを持っていないから、発砲しないだけのことだろう。

警察官は容疑者を取り押さえることが最も大事な任務だろう。しかし、捜査課の刑事はそんな場面に出くわすことが多いだろうけれど、一般の巡査は何十年間

の勤務で一度あるかどうかの経験だろう。業務日誌や、交番にやってくる人に対応したときの聞き取りなど、書類を作成する業務の比率が意外に高そうだ。交通事故一つとっても、事故の状況だけでなく、関係した人々の氏名・住所・連絡先など、こまごまとした情報を聞き出し、書類にしなければならない。時間のかかる作業でもある。

定型的な書式があって、それぞれの項目に記入するだけのものもあるかもしれない。

例によって状況を私が推測すると――

4月11日午後8時ごろ、一日の勤務で一番疲れを覚える時間帯だった。交番の中には二人の警官がいた。中年の巡査部長と若い巡査だ。事務机に向かって書類を見ていた作成を若い巡査に指示した。「全部、書き直せ！」と怒ったように言いながら、重差部長が本日の業務日誌の紙片を返してきた。

巡査はその場では「はい」と言って応じたが、若い巡査は戸惑っていた。勤務内容をかいた日誌がまた突っ返された。作成してからのことを考えると、徐々に鬱屈していた嫌悪感や屈辱感がこみ上げてきた。

何度も書き直しを命じられ、若い巡査は困惑していた。情痴陽の承認をもらわないと、書類として仕上がらない。書類を出しては、突っ返された。時には、一読して無言でほうり投げられた。巡査は、せっかく作成した書類を、上長格の警官にけなしまくられ、悔し涙を流した。

〈表現が悪いだと？　てにをはが間違っているだと？　てにをはとは何だよ？〉〈説明が足りないだと？　何が足らないというんだ！〉〈こんなもの、とは何だよ。子供の作文だと？　何を言いやがるんだ！〉

〈コノヤロー、オレを若造だと思って、また書類をオレに作成させてケチをつけたいんだろ。そんなに難癖つけたいなら、テメーが自分で作成すればいいんだ！〉

巡査部長の後ろに回っていた彼は、自分がそのパワーに勝る強力な武器を持っていることに気づいた。

〈これを使えば、いっきに解決だろ！　オレはもうコイツに書かされることはない〉

腰に取り付けていたホルスターからピストルを取り出し、彼にとって当面の仇敵である巡査部長の背中に向けて発砲した。「バン、バン」――

---

⑫審判を殴り倒したバスケット留学生

【毎日新聞朝刊 2018/6/18 社会

６月１７日、全九州高校体育大会のバスケットボール男子準決勝で、延岡学園高（宮崎）の選手が福岡大大濠高（福岡）との試合中に審判を殴るトラブルがあった。選手はコンゴ共和国からの留学生の一人で反則を取られた直後に審判に近づき、右拳で顔面を殴った。審判はその場に倒れ、病院に救急搬送された。審判は口の中を切り、１０針縫うけがを負った。県警は大村署で選手ら関係者から任意で事情を聞いた。その署内で選手は審判に謝罪し、審判は被害届を出さず、選手に「バスケットを続けてほしい」と言ったという。【毎日新聞朝刊 2018/6/29 クローズアップ

高校スポーツの強化のために、いくつかの高校がスポーツ留学生を受け入れているが、上意下達の運動部で、言葉が通じず、異文化に悩む。２０１７年７月時点で競技別留学生は２８１人登録されている。バスケットボールで留学生選手（15）が判定を不服とし審判を殴打して負傷させた。選手は近く帰国することが決まった。選手は味方の攻撃を助けるため、長身２０４センチの体を壁のように使って相手の進路を阻む「スクリーン」をして反則を取られた。試合途中で出場して２分間弱で三つ目の反則の判定を受けた。留学生への判定や観客の反応への苦言もある。同郷の２年生留学生も５度の反則で退場。複数の関係者は「留学生への判定は厳しい傾向がある。反則に観客が盛り上がることも多く、被害者意識を持つ留学生もいる」】

選手が審判を殴り倒した際の動画を見ると、黒い顔の大男が、審判に近寄って、向かい合う形になった。ほとんど間を置かず、長い右手を伸ばし、審判のあごにそのこぶしを当てた。審判は、棒が倒れるように、フロア上に倒れこんだ。身構えようともしなかった。無防備の状態だったから、まともに一撃をくらった。選手が殴ってくるとは予想だにしなかったことだろうが、私が欲を言えば、よけてほしかった。審判はしばらく伸びたまま横たわり、フロアには血が飛び散っていた。

その大男とは、コンゴ共和国からの留学生で、前代未聞の不祥事とメディアが騒いだ。留学生がこんな事件を起こすと、アフリカ系外国人に対する差別感情が高まってしまいそうだ。

警察も動き出し、調べた。警察署でこの選手は審判に泣いて謝り、審判は容赦したというが、本来は謝っ

て済むような問題ではなかった。障害事件として逮捕・送検されてもおかしくはなかった。しかしながら、悩める留学生の一人が引き起こした事件であり、同情すべき点もある。

この途中交代で出場した留学生は2月末に来日したばかりの高校一年（15）の少年だった。言葉の壁もあり（コンゴ共和国の場合、母国語はフランス語）、日本語がほとんど通じなかった。ホームシックにもなっていたという。

この選手は「途中で出場して2分間弱で三つ目の反則の判定を受けた」という。動き始めるそばから、「ピー」と審判に笛を吹かれていたから、怒りが高じてきたとみえる。

審判は「スクリーン」をしたというのだが、私はそれが反則だということに疑問を持っている。そもそもスクリーンは頭脳的なチームプレーの一種といえる。物の本によると、「ボールをもった選手の動きをたすけるために、別の選手がディフェンス側選手の進路をふさぐ位置に壁のようにたちはだかること。壁になる選手をスクリーナーという」とある。

ボールを持ってゴールに近づいていくとき、それを妨げようとする相手チームの選手の動きを封じるために、自分の体を「壁」にすることだ。要は、ボールを持つ選手を邪魔しようとする相手の選手に対抗するための手段だ。ボール保持者の手助けをするための行為であり、悪質性がまるで感じられない。しかし、コート上に立っているだけで、立つ場所によって壁とみなされる可能性があるわけだ。

相手の選手の体が「壁」になっても、自分は左右に動いて、よけるなり、かわすなりすればいいことだと思える。相手が「スクリーン」をしたかのように、ふるまう行為も容易に考えられる。相手の体に隠れるように、うしろにいれば、審判が相手を「スクリーン」とみなしてくれるかもしれない。

とはいっても、「スクリーン」を反則とすることをルールに定めているのだから、選手はそれを守って競技するしかないのは確かだ。「スクリーン」で何回も反則を取られるようなヤツは、ルールを知らないヤツとして見下されることになる。

審判としても、コート上で二つのチームの選手が入り乱れている中で、すばやい瞬間の動きを「スクリーン」と判定するのは、微妙なさじ加減があるものだろう。今回のケースでは、選手が何回も反則とされ、怒りまくるほど判定だから、厳しすぎたとも考えられる。

留学生は体が大きく長身だから、目立っていたことも特異的に判定された一因だろう。

留学生たちは日本でのプレーは多くなかったにしても、世界的に統一されたルールであり、自国でプレーしていたときには反則として取られていなかったと想像できる。反則したつもりはなかった。それなのに、日本で反則といわれるのでは、やはり不満になったことだろう。

反則によって笛が鳴らされ、試合がたびたび中断するのは、見ている側にしてもおもしろくない。5回まで許される軽いレベルの反則とはいえ、ひんぱんに笛を鳴らされていたんでは、プレーにならない。ただし、反則によってボールの持つ権利が移れば、そのチームを応援する側は単純にうれしい。相手チームの選手が反則をすれば、喜ばしいのだ。観客たちは、どうしても日本人選手をひいき目に見る。審判にそれがあってはいけないのだが……。大きい留学生たちが反則を取られると、観客たちや選手たちがワーと喜ぶ様子が目に浮かぶ。

そんな観客たちの前でプレーする留学生たちは、差別を感じることだろう。審判には反則ばかり取られ、出鼻をくじかれては、イヤになってしまう。彼らは、高校で授業を受けることは二の次であり、プレーするために日本に来ている。自分のバスケットプレーに自信を持っている。バスケットがうまいことで、わざわざ日本に来ているのに、反則ばかり取られていては、くさってしまう。審判が正しい判定をしているのか、疑りたくなる。

この選手はその直前にも、相手選手を後ろから倒したとしてファウルをとられた。この判定に不満を持っていた。なぜなら、偶然の接触だと思った。そして、また笛を鳴らした審判に、「このヤロー、なぜオレばっかりに反則を取るんだ！」と審判に詰め寄りたいが、言葉が出ないから、手が出たというところだろう。

監督・コーチにしても、審判が「スクリーン」を厳しく取ることを選手に注意すべきだった。それとも、「審判に1回反則を取られたら、自分で気づけよ」と、突き放していたのかもしれない。「日本では日本の審判に見とがめられないようにプレーしなきゃダメだろう」とも……。